『純友追討記』と大宰府

10世紀半ばに起こった藤原純友の乱と大宰府との関わりといえば、すぐに純友による大宰府襲撃を思い浮かべる方も多いでしょう。この大宰府襲撃およびその後の博多津における合戦を比較的詳細に記録しているのが『純友追討記』（以下、『追討記』）という史料です。この『追討記』が、いつ、だれによって、何のために作られたのかがわからないこともあって、その記述を信用してよいかについても評価が分かれています。ただ、いつ作られたかについては、『追討記』が『扶桑略記』という書物に引用されていることから、『扶桑略記』が成立したとされる11世紀末から12世紀初頭以前と考えられます。また、何のために作られたかについては、『追討記』にしか登場しない讃岐介藤原国風という人物が、讃岐国、伊予国における純友一党との合戦で活躍し、その追討に大きな功績があったことを強調するためだった、とする興味深い説が出されています。

こうした考え方を参考にして、もう一度『追討記』を読み直してみると違った見方もできるのではないかと思われます。それは冒頭に述べた大宰府襲撃と博多津合戦についてです。『追討記』には、大宰府が焼き討ちされたと記されていますが、このこと自体は『本朝世紀』という別の書物にもみえ、また大宰府跡の発掘調査によって、政庁跡第Ⅲ期造営の際の整地層から焼土が確認されていることからも、事実だと考えられます。博多津における合戦においては、追捕使等による純友追討のさまが記されていますが、ことに追捕使主典であった大蔵春実の活躍はきわめて具体的に語られており、合戦日記か、あるいは春実の勲功申請などに拠った可能性があるでしょう。大蔵氏はこののち、大宰府府官となり、11世紀初めの刀伊の入寇の際に活躍した大蔵種材は、この春実の末裔とされています。また、先に「比較的詳細に」と述べました。『追討記』そのものは全体で800字にも満たない記録ですが、大宰府襲撃・博多津合戦の叙述に、そのうちの約4分の1を割いていることもみのがせません。

このようにみて、『追討記』は、藤原純友の乱制圧において大蔵春実が果たした役割の大きさを強調する目的で作られたと考えるのは、地元びいきが過ぎるでしょうか。

公文書館　重松　敏彦